

作品紹介 長宝寺^{かんぎょうじよぶんぎす}「観経序分義図」(観経会座仏)^{かんぎょうえざぶつ}

仏教絵画はわかりにくいと言われることがあるが、一つ一つ紐解けば難しいことはない。今回紹介するのは、大阪市平野区平野本町に所在する長宝寺に伝来した、釈迦の説法の様子を描く絵画である。材質技法は絹本着色、法量は縦137.0×横60.0cm。

縦長の画面中央には荘厳された蓮華座に坐す金色身の釈迦、その向かって右に弟子の目連、左に阿難が立つ。釈迦は眉間から頭上へ光を放ち、その中に煌めく楼閣、さらに上部には光台上の極楽浄土を表している。そして画面左下には、大陸風装束の女が合掌し釈迦を仰ぎ見ており、傍らには経典を捧げる侍童が立つ。人物の着衣や蓮華座に見られる緑と青を基調とした彩色が清らかな印象を作り出している。

本図は経典『観無量寿経』(『観経』)の冒頭にある説話の一幕を表した絵画である。説話の主な登場人物は、釈迦、目連、阿難、マガタ国王^{びんぼしやら}頻婆沙羅、王妃^{いたたいけ}韋提希、その息子^{あじやせ}阿闍世。少し詳しく話を追ってみよう。

物語はマガタ国の王舎城において、阿闍世王子が実の父頻婆沙羅王を幽閉、王位を篡奪したところから始まる。王妃である韋提希は王の命を繋ぐため、バターに乾飯の粉を混ぜたものを体に塗り、胸飾りの中に葡萄酒を入れて密かに王に与え続けた。しかし阿闍世にそのことが露見し、自身も幽閉されてしまう。実子の非情な所業にこの世を憂えた韋提希が、遠く^{きやくつせん}耆闍崛山にいる釈迦に向かい「せめて弟子の目連尊者と阿難尊者を遣わして私を慰問してほしい。」と涙を流して礼拝すると、2人の弟子と釈迦自らが忽ち目前に現れた。苦悩や憂いのない清らかな世界を見せてほしいという韋提希の願いに応え、釈迦は眉間から光を放ち、十方諸仏の国土のきらびやかな様を示してみせた。韋提希はそのなかでも阿弥陀仏の国土である極楽浄土へと往生する方法を尋ね、釈迦はそれを教示した。『観経』ではこれに続き、往生のため必要な行いや浄土をイメージする方法などが説かれる。

本図では説話のうち釈迦が韋提希のために無数の仏国土、輝く極楽浄土を現出させる情景が描かれている。また空から

天人たちが花を降らせる様子も、釈迦を供養するものとして『観経』に説かれる。一つの場面を描いた絵画の背後に、実は大きな物語が存在しているのである。「観経序分義図」作品群の中でも『観経』から一場面のみを抜き出して描き、金泥ではなく彩色主体で画面を構成するものは珍しい。

なお無量寿とは阿弥陀仏、『観無量寿経』とは阿弥陀仏を観ずる(イメージする)経典という意味。序分義とは『観経』の冒頭をいう。よって本図は「観経序分義図」と呼称されている。また本図の箱には「『観経』の説法の場合の仏」を意味する「観経会座仏」という墨書があり、長宝寺での伝来名称がうかがえる。

さて、本図の表現については細やかな装飾が見どころの一つである。釈迦が纏う袈裟の緑の青緑色系^{うんげん}縵縵彩色(グラデーション)と金泥による動感のある植物文様、金色の文様が浮かぶ緑の內衣は透明感があり、袖下の右腕が透けて見える。釈迦の坐す蓮華座の蓮弁の一枚一枚には開いた花を思わせる装飾、その周りに光を宿した赤い宝珠文を配すなど美しい表現を多用する。

これらの特徴は中国の南宋～元時代や朝鮮半島の高麗時代の絵画に共通し、例えば元の支配下の高麗で制作された、東京・根津美術館所蔵の重要文化財「阿弥陀如来像」(1306年)の表現に似る。ただし本図はややフラットな彩色が見られることから、日本において制作されたと考えられる。鎌倉～南北朝時代作の愛知・曼陀羅寺所蔵「観経序分義変相図」が着衣などの部分的な変更のほかは、ほぼ奈良・円照寺所蔵の南宋～元代作の同作品を細部まで踏襲しており、模倣した可能性が高いのと同じように、本図も舶載された絵画を日本で写した作品である可能性がある。

本図が伝来した長宝寺は坂上田村麻呂の娘春子が開山し、代々女性が住職を務めている。もとは真言系の寺であったが、15代良心大姉が法然に帰依したのをきっかけに、以後真言と浄土の兼学の寺となったという。韋提希という女性が重要な役割を担う浄土信仰の絵画が伝来することは、尼寺という縁も多少なりともあってのことなのかもしれない。(石川温子)



「観経序分義図」(観経会座仏) 鎌倉～南北朝時代・14世紀
絹本着色 1幅 縦137.0×横60.0cm 大阪・長宝寺



部分図 花を降らせる天人(左上)、天花(中央)、極楽浄土(中央)